

アウグスチヌスの「三位一体論」Ⅷ— XIV巻における神の似像について

岡 崎 和 子

1. 『三位一体論』の8巻以降、頻繁に *imago Dei* という表現が見い出される。アウグスチヌスがここで神の似像というのは何を意味するのだろうか。この本の中心問題は神の三位一体である。一卷から7巻まで神の三位一体そのものについて考察して来たが、その深淵にはまりこんだアウグスチヌスは8巻以降で被造物の中に神の三位一体の類似と痕跡を求め、その探究を通して逆に神の三位一体を知ろうとする。それはパウロの、神は造られたものを通して⁽¹⁾知られる、という言葉に根拠を持つのであり、又その手掛かりとなるのは「人間を我々の似像と類似にかたどって造ろう⁽²⁾」という創世紀冒頭の句である。この「我々」という複数⁽³⁾をアウグスチヌスは、神の父、子、聖霊の三位と解する。従って人間を神の似像にかたどって造るとは、父、子、聖霊なる神の三位一体にかたどって造る事である。似像という表現の内容は、父、子、聖霊という三位一体の類似を持つものという事になる。しかし三にして一という構造は被造物の至る所に見られるのであるから、似像という特別な表現が用いられるのは、三にして一なるその内容が、最高度に神の三位一体を写しているものだからに他ならない。神の三位一体に於て、子は父から生まれ、父と本質を同じくし、聖霊は両者の間の愛であって、この三者は永遠的仕方で存在する。この構造を持つものが神の似像である⁽⁴⁾。

ではそれは人間の何にあたるだろうか。既に『告白』に於てそれは人間の存在⁽⁵⁾(*esse*)、知 (*nosse*)、意志 (*velle*) としてとらえられている。人間が存在する事が即知の事であり、意志する事であって、それが神の三位一体の似像であるという直観は『三位一体論』に受け継がれ、より深く探究されている。神の三位一体

が父、子、聖霊の靈的位格間に成り立つものである様に、ここでは似像なる三一性も、精神の中に求められる。アウグスチヌスはそれをまず *mens, amor, notitia* に於て、次に *memoria, intelligentia, voluntas* に於てとらえ、後者を更に詳しく分析する。*imago Dei* はこの考察の過程で徐々にあらわにされる。それは一回限り与えられた静的なものではなく、動的な在り方を持つものである様に思われる。

この *imago Dei* とは何かについて、『三位一体論』での探究の順序に即して多少明らかにしてみたい。

2. 精神に於て最初に見い出されるのは、*mens, amor notitia* の三一性である。この三一性発見への道を開くのは愛の考察である。人間のうちにはゆるぎない愛の事実がある。愛はどこかに傾かざるを得ないという人間の傾きであり、重さである。⁽⁶⁾人間のあらゆる動きは愛に源を持っている。この様な特質を持つ愛とは、それ自身のうちにどの様な構造を持つものなのであろうか。アウグスチヌスは愛の事実のうちに、愛する主体、愛される対象、愛という三一的構造を考える。愛の事実がある所には、必ずこの三つがある。⁽⁷⁾「愛」そのものは愛の主体と対象とを「結びつける、乃至は結びつける事を求める何らかの生命」である。それは主体をして対象を欲求せしめ、⁽⁸⁾それが獲得されるや主体と対象を結びつけるという一連の働きをする。⁽⁹⁾この構造を持つ愛に於て人間はあらゆるものと関わる事が出来る。可感的なもの、心のうちに取りこまれたそれらの心象、可知的なもの——心、そして遂には神をもその対象とする事の出来る生命的働きなのである。

この愛を以て精神自身を受する場合を考えてみると、この場合には愛の主体と対象とは同じであるから、一見するとそこには精神と愛の2つしか存在しない様に思われる。確かに愛の観点から考える限り、ここには三一的構造はない。するとこの点で、愛から出発する精神の内に於ける三一性の探究は挫折するのだろうか。しかしここでよく考えてみる必要がある。精神が自分を愛する時には既に自分を知っていなければならないのである。⁽¹⁰⁾一般に何かを愛する時には、そのものを何らかの仕方では知っているから愛するのである。この事は愛の積極的形態である研究熱心な (*studiosus*) 場合とか、好奇心のある (*curiosus*) の場合を観察するとはっきりする。その様な熱意は、何もない所から突然生じるのではなく、必ず

本人に既に知られている何らかの知によって燃え立たせられて生じる。それは既知のものからの想像的心象である事もあれば、そのものについての一般的知である事もあれば、人が各々自分の内で永遠的理念に照らして判断する事に関わる知である事もある⁽¹¹⁾。人間の自己愛も、この点に関して決して例外ではない。無意識的、本能的自己愛に於ても、自分を知りたいと自覚的に求める欲求に於ても、そこにはその愛を促す知が媒介されているのである。

ここに精神、愛、知という三一的構造が見い出される。精神にとって自分を愛する事、知っている事は、偶然的な事ではない。精神が存在するとは、それが自分を愛し、知るものとして存在するという事である⁽¹²⁾。精神、その愛、その知は存在に於て同時である。しかも三つの生命、実体ではなく、合わせて一つの実体である。そして精神が自分を、自分より劣ったものの様にでも、勝れたものの様にでもなく、本来的自己として知り、愛するに至る時には、この三つは相互に全く等しくなる⁽¹³⁾。その場合には、知は精神をその形相に従って写すのであるから、精神から生み出される子の様にある。従ってこの様な状態に於て、神の三位一体に於ける三にして一なる関係、生みの関係を有する精神の三一的構造が見い出される。

3. この三一性を見い出す事によって似像としての三一性は一応とらえられたとはいえ、それは輪郭を示すにすぎない。この様な三一性が生じる状態はどの様にして可能なのか。この問題は、この三一性をもっと詳しく探究する事によって明らかにされるであろう。

精神は自分を求める時、自分を知っているとされた。すると、それ以上に何を知らうとするのか。既に何を知って居り、更に何を知らうと求めるのだろうか。精神が既に持つ自己知は、自分以外のものを愛する時に持つそのものに似たものの知とも、一般的知とも異なっている。それは、自己愛の場合には愛の主体と対象が同じだからである。精神は何であれ何かを知っている事に於て、自分が何かを知る者である事を何らかの程度知って居り、その事を知る事に於て知の主体である自分を知っている。又、自分を知らうと求める時には、自分を探究している者として知っている。この様な了解は、「汝自身を知れ」と言われる時に、その言葉の意味が直ちに精神に理解される様な精神の自己同一性を表わすものであろう。

う。それ故精神は自分を探究する時に、全く自分を知らないのではなく何らかの程度知っているのである。すると知られているのは精神の或る部分であって、それがまだ知られていない他の部分を知ろうとするのだろうか。だがこの考え方が正しくない事は全体としての精神は全体として知の主体である、その自分が何かを知りつつあるものであると知っているのなら、その自分の知も全体的である筈だ、という事からも明らかであろう。精神の知、無知を、物的全体と部分の関係から考える事は出来ないのである。精神の自己知はそれとは異質なものであり、⁽¹⁶⁾自分を知らうとする欲求は、その自己をあらわにしようとする精神の内奥から促される欲求であると思われる。

4. この事は、人間に於ける *nosse* と *cogitare* という重要な区別へと我々を導く。人間は自分を知っているが、必ずしもそれを意識していないし、又、自覚していない。アウグスチヌスはこれを、知っている事 (*nosse*) と、思惟する事 (*cogitare*) という言葉で表現する。⁽¹⁷⁾知が意識され、自覚される為には思惟する事が必要である。では思惟 (*cogitatio*) とは何であろうか。

物的なものの心象が記憶に委ねられた後にそれを再び心の眼前に現前させる時、そこには記憶に貯えられていた心象と、心の眼に現前する心象と、その両心象を結ぶ、つまり心の眼前に心象が想起される事を可能にする心の注視 (*intentio animi*) という三一的構造がとらえられる。この場合に、この三つが一つに集められる、その集める事 (*coactus*) から、この動きは *cogitatio* と言われると説明されている。⁽¹⁸⁾この様に思惟は或るものを実際に精神の眼前にもたらす働きである。思惟は一度に一つの対象にしか関わる事が出来ないで、現実の人間に於ては様々な思惟が入れ替わり、立ち替わり継続している。思惟によってのみあらゆるものは精神の眼前にもちきたらされる。人間が自分自身を意識し、自覚するに至るその働きも、思惟以外のものではない。「思惟の力というのは非常に大きく、精神そのものでさえ自分を思惟する時以外には、自分を自分の眼差のうちに何らかの仕方で置く事をしないほどである」。⁽¹⁹⁾

しかしながら可感的、物質的世界の中で生きる人間にとって、霊的な精神を思惟する事には非常に困難がつきまとっている。この困難はアウグスチヌス自身が青年時代に長年苦しめられたところの、精神及び霊的なものを物的に表象せざ

るを得ないという困難である。人間は物的なものを感じを通して知覚し、それらは直ちに心象となって記憶に貯えられる。現在感覚によって知覚しえないものは、記憶のうちからその心象を想起する事によってそれに触れる。そればかりでなく意志の働きは、それらの心象を様々に組み合わせることで現実には存在しない想像的心象を作る事さえするのである。⁽²⁰⁾この様に、これらのものは空間的に対象化されるのであるが、人間が自分をこの仕方では思惟するならば、即ち、想像的心象を形作り、空間的对象化によってそれを自らの本性であると思う時に、人間の本性に関して誤った意見を持つに至るのである。

この様な誤りは容易には避け難い。何故ならば精神のこの様な在り方は日常的、無意識的に徐々に作られ、習慣化しているからである。その深い原因は愛にある。「精神がいかなる仕方でも自分自身を探究し、そして見出すか、探究する為にどこに向かい、発見する為にどこにやってくるかは不思議な問題である。実際、精神ほど何が精神のうちにあるだろうか。だが精神は愛を以て思惟しているものの中にあり、可感的なもの、即ち物的なものに愛によって慣れ親しんでいるので、それらの心象なしに自分自身のうちにある事が出来なくなっている。ここから恥ずべき誤りが生じ、自分のみを見る為に感覚的事物の心象を自分から切り離すという事が出来ない。それらは愛というにかわによって不思議な仕方でも精神と密着してしまったからである」⁽²¹⁾、「愛の力というのは非常に大きく、愛を以て長い間思惟し、気遣いという糊によってくっついて来た所のものを、精神が自分を思惟する為に何らかの仕方でも自分へと戻る時でさえ、自分と一緒に引きずりこんでしまう程である」⁽²²⁾。愛の持つ同化作用と習慣性とは人間を自らの外に連れ出し、⁽²³⁾内なる霊的本性の自覚を妨げるものである事がここで繰り返言われている。

5. 人間が自分の本性を見分ける為には外から知識を得る事は本質的には必要でない。むしろ、成長するにつれて自らに付け加えて来た様々なものを取り除く事こそ必要なのである。⁽²⁴⁾つまり、外なる様々なもの、内なる諸心象などに愛を分裂させる事なく、意志の志向を自分へと定め、集中しなければならぬ。⁽²⁵⁾精神の自己思惟は全く非空間的である。それは精神が現存する自分自身の深みに向きかわるという、内省の行為に他ならない。「精神の本性に属する何ものかがその眼差であって、思惟する時にそこへと、場所的仕方ではなく 非物的な向き

かわり(inco rpora conversio)によって呼び戻されるのである」⁽²⁶⁾。

内省によって人間は精神の内に様々な精神特有の在り方を見出す。他の無生物にも生物にもなく、精神にのみ固有な、可知的なものをとらえ判断する知性(intelligentia)によって⁽²⁷⁾、人間はまず自分が存在し、かつ知性を以てその事をとらえる存在である事を、更に内省の深まりにつれてその様な存在としての自分が記憶し、知性認識し、意志し、疑い、判断する、等を、疑う事の出来ない確かな事実としてとらえるのである。それは心象による知り方ではなく、それらが現存するという真の現存による知り方である。精神が無意識のうちにも知っている⁽²⁸⁾というのは、この様な仕方、この様な自分を知っているという事である。

この人間の本性的在り方に即して一つの三一的構造がとらえられる。即ち、記憶、知性、意志である。それは、他の様々な在り方は結局この三つを基本として成り立つからであり、又、後述する様に、ここに、可知的世界に開かれている精神の構造が見い出されるからである。更に又、神の三位一体が常に念頭にあり、その各項に類似したものが求められている事にもよる。記憶は知を貯え、知性は可知的なものを直観し、意志はこの両者に於てある所のものを享受し、使用⁽²⁹⁾する。この三つは各々の働きに於て明確に異なっているにも拘わらず、各々が独立した実体ではなく、一つの実体、即ち、各々がその面から見られた精神そのものであって、この点からは一であり、しかも相互に関係的に語られ、お互いに他を含み合う⁽³⁰⁾という点では三である。それ故ここには、三にして一なる構造がある。

人間の現象に即して先に見い出された、精神、愛、知に於ける精神の常なる自己知、自己愛は、この新たに見い出された三一性に即して、精神は常に自分を記憶して居り、知性認識して居り、愛していると言い換える事が出来るであろう。⁽³¹⁾

6. しかしながらこの自己知は思惟によってしかあらわにされない。「精神は思惟によって自分を見る時、自分を知性認識し、再認する。それ故この自分に関する知性認識されたものと認識を生む」⁽³²⁾。この思惟に於て更に三一的構造がとらえられる。思惟がそこから形成される所のもの、思惟によってあらわにされたもの、そしてその両者を結合するものである。第一のものは、そこにその知が貯えられている所の記憶であり、第二のものは知性認識された自己であり、第三のものは意志である。即ち、思惟における三一性も、memoria, intelligentia, voluntas

なのである⁽³³⁾。しかし、精神は思惟する前にも自分を知って居り、愛していた。記憶にあるものがたとえ思惟されていない時にも記憶に貯えられている様に記憶していた。「精神は自分を、恰かも自分が自分にとって自分の記憶であるかの様に知っていた」⁽³⁴⁾のである。しかも、或る過去に認識した自分を記憶して居り、思惟する事によってその自分を想起するのではない。思惟されていない時にも精神は自分を知って居り、愛しているのである⁽³⁵⁾。それ故、思惟を媒介として、同じ三一性が二重の意味で用いられる事になる。思惟にまでもたらされていない三一性は、より内なる自己記憶、自己認識、自己愛 (*interior memoria qua se meminit, interior intelligentia qua se intelligit, interior voluntas qua se diligit*) であり、この全体が思惟によって精神の眼差のうちに、いわば白日のもとにさらされた如くに置かれる時には、より内なる三一性全体を記憶として、これが再認識される。それは、記憶にある知が、思惟によって、いかなる具体的な言葉でもない内的な言葉として形造られる事である⁽³⁶⁾。思惟は内的な言葉を生む行為なのである。

思惟を媒介とするこの三一性に於ては知が外から得られたものでも、精神に於て時間的に生じたものでもなく、精神の存在と共にあった。それが思惟によって内なる言葉として生まれるのである。かくしてここには、神の三位一体に於て御父が自らを御言としてあらわし（即ち、その御言には御父との最高の等しさがあるという仕方でも御言なる御子を生み）、両者から発する聖霊は両者の相互愛であって、この三つは神の内的生命を構成し、永遠に発出しているという、神の三位一体との類似が最高度に見出される。それ故にこの三一性こそが *imago Dei*⁽³⁷⁾である。

7. しかしながらこの三一性が神の似像であるのは、精神が自分を記憶し、知性認識し、愛するからではなく、自らの造り主を思い出し、知性認識し、愛する事が出来るからであると言われている⁽³⁸⁾。この事は何を意味するのだろうか。他の所では、精神は「造られざる神を受け入れうる者として造られ、その神に与る者⁽³⁹⁾でありうる」と、或いは「…それによって精神が神を知って居る、乃至は知る事の出来る所の間人精神の主な部分……そこに神の似像を見出そう⁽⁴⁰⁾」ともいわれている。それは、精神はこの三一的構造に於て、神に向かって現に開かれて居り、更に開かれうるものとして造られているという事ではないだろうか。精神の

三一性は神を対象とする事を可能にする精神の形式である。

まず神と記憶について考えてみよう。『告日』の記憶論で展開された様に、記憶はその内にあらゆるものを含む廣大無辺の領域である。一般に思い起こされる (commemorari) 事によって想起されうるものはすべて何らかの仕方で記憶にあると⁽⁴¹⁾考えられる。神はどうであろうか。アウグスチヌスによれば、神は精神の生命であり、光である。創造者として人間にこの世に人間としての存在を与えるのみならず、現存する人間の根源的な精神活動を可能にする光なのである。人間は真偽の判断を、神の内にある諸規則 (regulae) 乃至諸理念 (rationes) に従って、神なる光に照らされる事によってしかする事は出来ない。それらの regulae も rationes も、照らす光も、人間の外から入って来るものではなく、精神の内奥に於てしか知られる事の出来ないものである。その光は、人間がそれからそむいても、常に照らす事をやめない光なのである。⁽⁴²⁾神御自身が記憶に在るとは言えない。精神の創造主、生命であって、精神の内におさまる事はありえないからである。⁽⁴³⁾ただ、精神は記憶の内奥を通して、神の存在を知るのである。その神を思い出し、知性なる精神の眼によって神の真理を直観する事が神の intelligentia である。それは究極的には神をこの世の後に、人間に出来る限りあるがままに見る visio Dei に連なるものである。その神に縋りつくのは愛 (dilectio) であり、意志である。それ故、精神は memoria, intelligentia, voluntas という三一的構造によって神と関わって居り、関わる事が出来ると言えよう。

更に、思惟を媒介とした人間の memoria sui, intelligentia sui, amor sui と、memoria Dei, intelligentia Dei, amor Dei とは深い意味で結びついていると思われる。思惟を媒介とした人間の自己認識は、それが全き仕方で行われるなら、人間が自分の本性と存在の意味を同時に知る認識である。即ち、自分が造られたもの、しかも似像として造られたものであって、その様なものとしていかに生きるべきかを知る認識である。⁽⁴⁴⁾「造られた自分」という自覚は、「造ったもの」が何らかの仕方で知られなければ生じない。アウグスチヌスによれば、ものの真の認識とはすべて、そのものがそれに従って造られた所の形相の認識である。その様な認識は神なる永遠の真理へと人間が目を向ける事によってしか得られない。⁽⁴⁵⁾この意味で真の自己認識は、神の想起、認識と相補的である。

この事を精神の三一的構造から見ると、次の様に言えるのではなからうか。既述した様に人間は存在を知りて高める存在である。存在する事はそれを知る事であり、欲する事である。 *esse, nosse, velle*, 乃至 *mens, notitia, amor*, 乃至 *memoria, intelligentia, voluntas* の三一性に於て、知にまで高められるものものが *esse* であり、*mens* であり、*memoria* としての存在である。ところで人間は神によって、神に向けて造られた存在である⁽⁴⁶⁾。それ故この存在を知るとは、それが全き仕方で行われるなら、神に向けて造られた存在としての自分を知る事であると考えられる。即ち精神の三一性は、いわばその背後に神の記憶、知性認識、愛を持つものと考えられるのである。

8. この様に、人間は神によって神に向けて造られ愛は神に向かう事によって本来的な安らぎを得る筈であるのに、人間の本性そのものが原罪によってそこなわれている故に、その事を忘れて自分だけを愛そうとする。愛は神から離れ、そむき、被造物の中に埋没して、精神の本来の自己は覆われる。*imago* は本来あるべき姿がそこなわれる⁽⁴⁷⁾ (*deformari*)。しかしかにならぬ⁽⁴⁸⁾ *imago* そのものが失われる事はない。何故ならいかなる状態に於ても本能的、自然的自己愛を人間は持って居り、その事に於て、その程度にはあるが自分を持って居り、その事を通して神を思い出す可能性を持つからである。神を外からの勧めによって思い起こされ、再び見出し、その神に全身が向きかわる事によって *imago* は再び形造られ⁽⁴⁹⁾ (*reformari*) 始める。それは神を神として認め、特に愛する事であり、自分を原理とした愛から、神を愛する事への方向転換である。愛は神を愛さない限り自己愛であり、すべてのものを自分の為⁽⁵⁰⁾ に享受する事によって、その愛の主体をも傷つけ、そこなうものであった。神を愛する事によってすべてのものが正しく愛され、秩序づけられるようになる。しかし神を忘れ、被造物の中に埋没した人間は、そこから戻る力さえ失っている。神の想起、神への全身的向きかわりは神の側⁽⁵¹⁾からの恩寵によってのみ為されるのである。この様にして新たに形造られ始めた *imago* は、この歩みを続ける事によって、この世の後に遂に神を完全に見るに至る時に、*imago* としての類似が完全になるのである⁽⁵²⁾。

註

- (1) ロマ書 1, 20
- (2) 創世紀 1, 26
- (3) De Trinitate, VII, 6, 12
- (4) 端的に神の似像と言われるのは神から生まれ、本質に於て等しい御子のみである。人間は神に似る事によって神に近づく所の、造られた似像である。loc. cit.
- (5) Confessiones, XIII, 11, 12
- (6) *ibid.*, XIII, 9, 10
- (7) De Trin., VIII, 10, 14
- (8) loc. cit.
- (9) *ibid.*, IX, 12, 18 De Trin に於ては、最も広い意味での amor も、神への愛を専らあらわす dilectio も、amor の自覚的形態とも言える voluntas も、その固有な意味に於て用いられている一方、殆ど区別されずに神の三位一体に於ける聖霊の、「結びつける働き」の類似として用いられる様である。
- (10) *ibid.*, IX, 2, 3
- (11) *ibid.*, X, 2, 4
- (12) *ibid.*, XV, 6, 10
- (13) *ibid.*, IX, 4, 4
- (14) 本論の7参照
- (15) De Trin., X, 3, 5
- (16) *ibid.*, X, 4, 6
- (17) *ibid.*, X, 5, 7
- (18) *ibid.*, XI, 3, 6
- (19) *ibid.*, XIV, 6, 8
- (20) *ibid.*, XI, 8, 13
- (21) *ibid.*, X, 8, 11
- (22) *ibid.*, X, 5, 7
- (23) これは『告白』I—VII巻までに述べられている切実な体験に対応する。

24 De Trin. X, 8, 11

25 loc. cit.

26 ibid., XIV, 6, 8

27 ibid., X, 5, 7

28 ibid., X, 10, 14—16

29 ibid., X, 10, 13

30 ibid., X, 11, 18

31 ibid., X, 12, 19

32 ibid., XIV, 6, 8

33 ibid., XIV, 7, 10

34 ibid., XIV, 6, 8

35 ibid., XIV, 7, 9

36 ibid., XIV, 7, 10 思惟による何らかの自己認識は一回限りのものではない。

人間は存在を知にまで高めるものであるから、*esse nosse, velle* の過程は経験の増大と共に *esse* を大きくしながら積み重ねられる。アウグスチヌスが XIV 巻のここで語っているのは、もっと根源的な自己認識であると考えられる。

37 loc. cit

38 ibid., XIV, 12, 15

39 loc. cit.

40 ibid., XIV. 8, 11

41 Conf., X, 8, 12—26, 37

42 De Trin., XIV, 15, 21

43 Conf., X, 25, 36

44 De Trin., X, 5, 7

45 ibid., IX, 7, 12 ; cf. VIII, 3, 5

46 Conf., I 1, 1

47 De Trin., XIV, 14, 18

48 ibid., XIV. 14, 19

49 ibid., XIV. 16, 22

- ㉔0) *ibid.*, XIV, 14, 18 ; IX, 8, 13
- ㉔1) *ibid.*, XIII, 11, 16 ; XIV.15, 21
- ㉔2) *ibid.*, XIV, 17, 23